

## 471. 健康・スポーツライフの評価

## —大洋村健康づくりプロジェクト(9)—

○西嶋尚彦, 久野譜也, 岡田守彦  
 (筑波大学) 熊谷もりえ (大妻女子大学)

石津政雄 (大洋村)

【目的】本研究では、健康・スポーツライフを志向した運動・スポーツ活動、健康・体づくり活動、健康体力などに対する意識における主体的要因構造を統計的に明らかにし、健康・スポーツライフにかかわる調査項目の内容的妥当性を確認することを目的とした。

【方法】分析の対象とした標本数は、20歳代～80歳代の男性76人、女性58人、計134人であった。年齢の平均値および標準偏差は59.2±16.2歳、男性が49.8±17.6歳、女性が57.6±13.3歳であった。

調査内容は、日常生活における運動・スポーツ活動の理由および効果、運動・スポーツ実施形態、日常生活における健康習慣、健康不安、不定愁訴の発現状況などであった。調査項目は、総理府の体力・スポーツに関する世論調査の項目に準拠した。

主体的要因構造および調査項目の内容的妥当性を検討するために探索的因子分析を用いた。主成分分解法により固有値1.0以上の因子を抽出し、バリマックス直交回転により因子構造を得た。

【結果と考察】日常生活における運動・スポーツ活動理由では、11項目の全分散の55.9%を説明する3因子が得られ、身体的健康づくり、身体活動、精神的健康づくりの3つの下位領域から構成されていることが推測された。

日常生活における運動・スポーツ活動効果では、11項目の全分散の75.2%を説明する5因子が得られ、身体活動的効果、身体的健康づくり効果、生活の充実効果、精神的健康づくり効果、肥満・疾病予防効果の5つの下位領域から構成されていることが推測された。

日常生活における運動・スポーツ活動の理由および効果を併せて、活動志向要因を分析した。22項目の全分散の70.5%を説明する7因子が得られ、身体活動的志向、友人交流志向、肥満・疾病予防志向、家族交流志向、身体的健康志向、精神的健康志向、QOL志向の下位領域から構成されていることが推測された。

日常生活における健康習慣では、20項目の全分散の65.5%を説明する7因子が得られ、飲酒・喫煙規制、健康管理、睡眠・休養、体力管理、余暇生活、食生活、スポーツ活動の下位領域から構成されていることが推測された。

健康不安では、8項目の全分散の51.6%を説明する2因子が得られ、健康・体力の衰え、肥満の心配の下位領域から構成されていることが推測された。

【まとめ】調査項目間の相関関係は、対象とした標本の特性を反映するために、各項目が仮定された構成概念を忠実に測定するとは限らない。調査から得られた統計情報を集約化する場合には、項目間の相関性から構成概念と項目との間の関係である測定モデルを再検討し、項目の内容的妥当性を確認することが望ましい。

スポーツライフ調査 妥当性 因子分析